

第 10 回「京都御苑ずきの御近所さん」

御寺泉涌寺塔頭即成院住職

平野 雅章 様



■泉涌寺という名前の前に「御寺」とつくのは他にお見かけしません。「御寺」と普通の「寺院」とは何が違うのでしょうか。

御寺^{みてら}というのは、私がお務めをさせて頂いていた御本山泉涌寺の尊称です。全国で唯一、泉涌寺だけが名乗ることができます。

泉涌寺は皇室の菩提寺にあたります。お寺の御紋も菊の花びらが 16 枚ある正式な十六八重表菊の御紋証です。これは他の宮家でも使えません。拝観の方によく「おてら」と読まれたり、「どうして泉涌寺の前に『おてら』と付けて『てら』を重ねるの」と聞かれます。通常のお寺との違いは、皇室の菩提寺であり、全国に泉涌寺しかないということです。よく勘違いされるものに門跡寺院があります。門跡寺院は京都にもたくさんあり、御門跡様というのはもともといわゆる御皇族出身の方でその宗派のトップまでいかれた方を指します。

御寺^{みてら}という別称は、歴代の天皇様が「ここは自分たちのお寺だから」ということでわざわざ「泉涌寺にお参りしよう」とは言わずに、親しみを込めてお寺の前に御中の「御」を書いて「み」と読み、「御寺にお参りしよう」と呼ばれたところから定着しました。簡単にいうとお寺のニックネームといったものになりますかね。

皇室とのつながりは、鎌倉時代に四条天皇様が亡くなられた際、四条天皇様が泉涌寺の開山俊仍^{しゅんじょう}律師を篤く敬っておられたということもあって、泉涌寺で御葬儀が執り行われ御陵も泉涌寺に造営されました。それ以来の御縁となります。江戸時代はすべての天皇様の御葬儀、いわゆる大喪の礼を泉涌寺の境内で行っていました。御所で陛下が亡くなられたら、早馬が京都の町中を突っ切って泉涌寺に来まして、その馬に乗って管長猊下にあたる長老が迎え、着いたらすぐに枕経をお唱え始めるというスタイルだったとお聞きしています。

泉涌寺の今の正式な名称は、総本山御寺泉涌寺といいます。宗派は真言宗の泉涌寺派ということになりますが、泉涌寺は元々、諸々の宗派を兼ねて学ぶ道場という意味の諸宗兼学の道場としてスタートしています。天皇家は代々、宗派が決まっていませんので天皇様や皇后様によって御宗旨が違います。その時の天皇様が御信仰されていた御宗旨に基づいて泉涌寺は今も諸宗兼学の精神で各宗の読経や法要も修行しますが、明治時代に入って新政府より「これからは何々宗派と決めてくれ」とお布令がออกมาして、たまたまその時、明治天皇のお父様である孝明天皇様が真言宗を御信心だったのでその宗派になったという訳です。もし、孝明様が違う宗旨だったら別の宗派を名乗っていたかも知れませんね。

■御住職が生物多様性保全や地球温暖防止の活動を展開されています。その理由と活動内容を教えてくださいませんか。

私どものように、お寺やまた神社などをお護りしてそこで暮らす者は、身近に広大な境内地があって、その中には樹木や植物が生育し、池などには昆虫や微生物に至るまですばらしい命の育成、自然があります。ですが、近年、京都の寺社でも、経済的なことやいろいろな理由で境内地がなくなり、近代的なビルが建ったりしています。今の地球にあるすばらしい自然の恵みを次の時代の人たちにどのように残していけるかというのは、一つ大きな課題だと考えるようになりました。

日本人は元々、目に見えるものはもちろん、見えないものにも神や仏の恵みがあり、神秘的な力に守られ、そうした力に感謝するまさに祈りの精神が身体の中、血の中、DNA や遺伝子の中にもあって、ずっと伝わってきていると考えています。この祈りの精神は他の国ではなかなか理解されません。ですが、やはり日本でも多種多様な国の人の考え方が入ってきて、欧米化や近代化が進み、物事をすべて科学的、近代的に捉えがちになっていっています。昔の日本人のように科学的に説明できないことでも、信じ・護る精神を呼び起こし、日常の中の小さな自然に対しても感謝の気持ちを今、残していかなければなりません。でないと、日本のような限られた自然環境しかない小さな国はあつという間に多くの自然が失われてしまいます。もちろん逆に例え日本の国土全部を自然にしたところで、アフリカなどの大きな国からしたらほんのわずかな部分にすぎません。でも、持っている国土の面積は小さくても、日本人の持っている祈りの精神や物を大事にしたりする精神的なもの、暮らしの中で芽生えた宗教観だったり価値観だったり文化的なものを、自然環境を残していくうえでの考え方や行動にあてはめていけないだろうかと思えます。

そうした思いから、去年（2015年）の5月、京都を中心に著名な哲学者、宗教家や文化人の方々とともに社団法人自然環境文化推進機構という団体を立ち上げ、去年の11月には最初のフォーラムを清水寺様でさせていただきました。

現在は、世界に発信する文化宗教観光都市である京都の歴史的にも貴重なお庭などを含め、生物環境調査などを行っています。例えば疏水から琵琶湖にいる外来種が入り込んで生態系を壊していないか、アライグマが急激に繁殖して、歴史的建造物などを破壊していないかなど、近年直面している身近な問題も、お寺や神社が持っている境内地を含め、山岳地などの自然環境溢れるところで、こういった問題や危機的状況に直面されているかなどを直接お伺いし、何から早急に対応するべきであるかを考え行動することで自然界すべての保全に貢献したいと考えています。

■仏門の方の生活を想像できないので教えていただきたいのですが、平野住職様の日常はどんなものでしょうか？

大体年間を通して朝5時半までに門を開けて、6時までお勤めをするようにしています。朝の勤行の時には、お供え物を用意してお経を唱えます。お勤めの後に朝食を頂いて、8時半にはお参りの方をお迎えできるように中の扉を開けます。うちは檀家寺でもあり、信者寺でもあり、さらには観光寺院でもあるという非常に多くの側面があります。何々寺と言いづらいです。お参りに来られる方もあれば、御祈禱をお願いしに来られる方もあります。仏様をより近くでお参りたいと拝観される方々や、観光客の方もいらっしゃいます。御近所のお話を聞いたり、お勤めをしたり、お堂や仏様の説明をして御案内をしたりしていると大体夕方になります。その後は夕食を頂き、ちょっと調べものなどをして一日が終わります。

お寺は定休日がないので、自分がこの日休みたいと思っても、たまたまその日に何かお仕事が入ったりお葬式が入ったりすると休めません。仏様のお世話をさせて頂くことにだいたい休み

がないものですから、当たり前のことなんでしょうけど、普通のお仕事をされていると、ちょっと理解しがたいでしょうね。

■思い出の中で、京都御苑にまつわるものはありますか？

私は京都市生まれですので、昔から御所は大きな広場のように感じていました。遠足でもよく行っていました。あと、中学の時は、軟式テニスクラブに所属していましたので、部活でも御所の中のテニスコートでテニスをしていた思い出があります。当時、京都市内で貸してくれるコートは少なかったので、よく覚えています。

また、泉涌寺に奉職中だった頃は、御所様との関係で、皇族方の警備のやりとりやいろいろな御用で何度も宮内庁京都事務所に寄せて頂いておりました。

今は、毎年4月に毎日新聞社主催の全日本学生音楽コンクールの優勝者（クラシック高校生各部門）を、仏様のオーケストラと呼ばれる私の自坊、即成院に招き、特別に奉納演奏の場を提供するとともに京都研修を提供しています。これは、将来的に世界で活躍することが約束されています彼ら彼女らも、世界に飛び出せば、音楽関係者だけでなくさまざまな国と文化を持つ人たちと交流することになります。その時、必ずと言っていい程、話題に上がるのは「日本とはどういう国ですか？」「日本人は何を信仰しているのですか？」「日本にはどういった文化があるのですか？」といった日本という国の根本を聞かれることとなります。そういった質問に答えるためには日本の歴史・文化に興味を持ち、勉強しておく必要があります。この京都研修では、日本にはどういった文化や伝統が息づいているか知って頂き、興味を持ってもらうことに主眼を置いて1千年の都「京」で若き才能を持った音楽家を真の“日本人”に成長させるためにさまざまな方々の御協力を頂き、主に京都御所や京都迎賓館、離宮などに御案内させて頂いています。

■京都御苑で好きな場所、好きな時期などありますか？

中学生の頃、御所にテニスをしに行っていた時に、富小路休憩所でジュースなんかの冷たいものを飲んで休憩しては、またコートに出てプレイしたという思い出がありますね。今はもう夏は暑すぎて嫌いですけど、小さい時はそうでもなかったんでしょうね。御所のテニスコートに行くと、休憩所で冷たいものを飲んだり、かき氷を食べたりするのがすごく幸せでした。思い出深いですね。

御所の中には当たり前のように大きな木や砂利道がありますよね。そういった木の下もやっぱり涼しいんでしょうけど、小さいながらも御所というのは汚しちゃいけない場所と思っていたので、砂利で遊んだり芝生で寝転んだりとかはやっちゃいけない、みっともない行為であるという気持ちがあったので、自由にくつろげる売店の方に行くことが多かったですね。

■京都御苑の今後について、御意見などございましたら、自由におっしゃってください。

今、京都は特に外国の方が増えて、御所や迎賓館もそうですが、一般開放される方向に進んでいます。でも、御所一帯は、海外からお招きした特別なお客様の特別な場所として、きちんと守っていかないといけないと思います。特別感と常に見られる開放感とその上手な境目というのが大事だと思います。

例えば、東京の皇居は、堀の周りを毎日ランニングされている方がいますが、何かあった時

はそういう方々もストップされて、すごく上手な警備をされています。そのことに対して誰も文句を言わず大人な対応でなりたっていますよね。「皇居は天皇様のおられる場所だ」ということを東京の市民も海外から来る人もわかっています。それが京都御所の方でも、京都の市民や京都にやってきた外国の方が、同じように捉えることができるのかなという心配はありますよね。天皇様がまた京都にお住まいになる可能性ももちろんありますし、京都の人や京都に来る外国の人たちが、ちゃんと警備に対応できるのかという不安はあります。

常に静寂であってほしいけれども、片一方でインバウンドの観光客のたくさんの人にも見てほしい。そこのバランスが難しいですね。

あまりにも今は海外から来られる方が多く、開放政策というのが大きく出ているものですから疑問に思う時もあります。自由に出入りできるのは、別に春秋にある一般公開の時だけでもいいんじゃないのかと私は思いますね。

御所一帯を、いつでも綺麗に整えるって大変ですし、庭もずっと見られていたら大変だなと思います。庭に誰も入れず、野生的に放置して、樹木をストレスから和らげる季節や時期が必要なんじゃないかなと思います。

2016年12月13日 インタビュー
聞き手：田村省二，山本昌世

○平野雅章さま プロフィール○

京都市生まれ。佛教大学文学部仏教学科卒業。高野山専修学院で修行の後、総本山御寺泉涌寺に奉職。同寺執事・教学部長，京都仏教会監事，近畿宗教連盟常任理事等を歴任。現在は，公益社団法人日本漢字能力検定協会（漢検）評議員，一般社団法人自然環境文化推進機構理事・事務局長。2012年泉涌寺を退職し，現世極楽浄土と呼ばれる即成院住職に専念。